

社会資源を活用した独居認知症患者の在宅療養支援

(医) 城南会 西條クリニック 鷹番

○盛合千草 (モリアイチグサ) 長尾真由美 佐藤明子 藤田菊恵 奥脇美奈 平林喜久子
鈴木佳子 嶋貫久美子 西條公勝

【目的】

認知機能障害がある独居透析者の在宅療養生活を支援する

【対象】

50歳代 男性 独身 原疾患不明 透析歴 19年

親族は東海・関西地方に居住

【経過】

一年前頃より透析中に起き上がろうとする、自己抜針など異常な行動や、他患者の上着を着てスリッパのまま帰宅するなどの見当識障害が散見されるようになった。家族付き添いのもと A 大学病院神経内科を受診し、多発性ラクナ梗塞、多発性微小出血による脳血管型認知症と診断され厳格な血圧管理を指示された。しかし、独居であり降圧剤、抗血小板剤等を含めた服薬管理などセルフケアは難しい状況であった。家族は施設入所を望んだが、本人の「住み慣れた家を離れたくない」という強い希望があったため、社会資源を活用した在宅療養生活への支援に取り組んだ。

【方法】

1. 介護認定の取得への援助
2. ケアマネージャーとの連携
 - ①情報提供 ②ケアプランの評価
3. 透析来院時に体調把握
 - ①服薬状況と血圧、血液検査の評価 ②体重増加量と食事・水分摂取状況評価
4. 家族との連携

【結果・考察】

透析室看護師が家族・ケアマネージャーとの連携の中核となり相互に情報を共有化したことにより、患者の生活パターンとニーズに合わせた社会資源の活用ができた。透析者は住み慣れた家を離れることなく現在も在宅療養生活が継続できている。